



TITLE:

<大會抄録>都市とワクフの諸關係

AUTHOR(S):

三浦, 徹

CITATION:

三浦, 徹. <大會抄録>都市とワクフの諸關係. 東洋史研究 2003, 62(3): 506-506

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155525>

RIGHT:

いたテュルク系部族であるハラジュが、七・八世紀、ヒンドウ・クシユ山脈の北麓に居住していたことが明らかになったのである。本發表では『新唐書』謝颺國傳の「謝颺居吐火羅西南、本曰漕矩吒、或曰漕矩、顯慶時謂訶達羅支、武后改今號」という文章を手がかりに、そこに見える「訶達羅支」と、いわゆる *Nesak Shāh* 貨幣に見える銘 *Nesak* とをハラジュに同定することによって、これらの王國の起源を同部族に求め、併せてこの兩王國成立の経緯をあらためて検討する。

都市とワクフの諸關係

二 浦 徹

九〇年代の都市研究が、畫一的な「イスラム都市論」の解體であるとするれば、近年は個別都市の研究を踏まえたうえで、總合化をめざす動きがみられる。本發表では、イスラム世界の都市空間の形成・發展・衰退といった歴史的變化の原理を、エジプトとシリアの都市を例に議論し、變化を軸に示えることによって、固定的な都市定義にかわるモデルの提示を試みる。

中近世のイスラム都市は、物理的空間としては目的や規模の異なる多様な施設の混在・密集によって特徴づけられるが、基本單位は、方形のブロックであり、その自在な結合によって發展した。宗教施設と維持運営の財源としての經濟施設とを結びつけるワクフ制度は、都市と農村、軍人の支配層とウラマーと市民を連結し、

都市發展の原動力となった。都市の宗教施設や經濟施設の建設數を分析すると、特定の都市や時代への集中が見られ、ワクフという投資を集めうるかどうかは都市の消長に影響していた。

ワクフを利用の平面でみれば、個々人による細分化された利用に依據していた。ワクフが増えるとともに、他方でその收益をめぐる争いが起こり、管理者や吏員によるワクフの私物化によって、施設や都市が荒廢する。都市とワクフの關係を、建設・寄進、運営・利用、衰退の三つの側面から検討し、むすびとして、オスマン統治初期のダマスカスのワクフ調査臺帳から、ワクフをめぐる物と人々のネットワークを再構成する。

歸納と類推

——中國的思考様式を探る——

武 田 時 昌

中國では、注釋學が古くから盛んだったこともあって、具體的な事物からの歸納に力點が置かれ、演繹的な議論を展開することは稀であった。中國科學史文獻においても、代表的な理論書とされる『九章算術』劉徽注や『黃帝內經』においてすら、演繹的な論證はほとんどなされていない。そのために、中國科學の理論的枠組みを構造的に把握するうえで大きな障害になっていることは確かである。それを克服するためには、歸納の方法論における思考様式を明らかにし、その特色を探る必要があるだろう。